作品に関わる様々な情報を与えた鑑賞の授業実践Ⅱ

橘　由紀恵　・　三根　和浪*

要約：本研究では，鑑賞において，「解釈」，「批評」，「共有」をキーワードとして，作品に関わる情報を与えたとき，生徒の感じ方や表現がどのように変わるかを検証することを目的としている。本稿では検証にあたって，情報の質や与えるタイミングを考え，より豊かな感性を引き出すようにした。その結果，作者の人生などの情報を与える前と後の生徒の鑑賞文を分析したところ，情報を与えた後のほうが，情報をもとに自分なりの解釈をして，根拠をもって想像して書いた生徒が多いことした。作品に関わる情報の質や与えるタイミング，掲示方法についての見解も得られた。

キーワード：科学的概念，鑑賞，分析

Ⅰ．はじめに

本校では，小学校・中学校の学びのつながりを大切にしている。小学校の図画工作の内容を知り，中学校では小学校で養った力を活かして，より感性を高めていく授業を実践している。小学校低学年のⅠ期では，アートゲームの導入による能動的な鑑賞活動の中で，美術作品から受ける印象や気づきなどを多様な言葉に置き換えることを通して，児童の内言の発達を促し，鑑賞学習の基礎を培っている。小学校高学年，中学校１年のⅡ期では，美術作品を媒体とする対話型コミュニケーションを通して，美的対象に対する個々の見方や感じ方を伝え合い，交流し合うことを通して，思考をさらに進化させている。これらのことをふまえ，中学校２・３年のⅢ期では，美術作品やその作家に関する知識，色彩や構図，技法に関する理論など（科学的概念）を積極的に取り入れ，個々の生徒がそれぞれの生活経験の中で培った感覚（生活的概念）を摺り合わせながら鑑賞することによって，より高次な思考・判断が可能になる授業を実践している。作品と出会った時に生まれる個々の主観的な見方や感じ方だけにとどまらず，様々な理論（色彩や配色の効果，構図，図像学など）や情報（美術史，時代背景，作者のプロフィールなど）を関連づけながら美術作品を捉えることが必要と考えられる。また，科学的概念を踏まえた明確な根拠のもとに自分なりの解釈をし，新たな価値を獲得することが必要と考えられる。これらの学びのサイクルの中で科学的概念と生活的概念の行き来が促されることによって，より高次な思考・判断ができるようになることを期待している。

Ⅱ．研究の経緯

今までの授業では，作品についての情報を与えずに自由に感じたことを表現させるような鑑賞の授業を行ってきた。例えば，ゴッホの「星月夜」について，作者の気持ちを想像して感じたことを自由に想像して書くよう指示した。その時，共通点はあるものの，個人の考え方が感想に表れた。しかし，その一方で，何を書いていいか分からない，何も感じない，という生徒も少なくなかった。そこで，作品に関わる様々な知識や美術的な理論（科学的概念），作家のエピソードや生き方などと出会う経験が，個々の鑑賞能力のさらなる高まりにつながると考えられる。

昨年度の研究では，科学的概念につながる情報を授業の最初に教授し，そのあとで感じたことを表現させる授業を実践した。しかし実際の生徒の反応から，必ずしも情報を先に与えることで生徒の鑑賞の視点が広がり，その能力が高まるとは限らないことがわかった。例えば，作者のプロフィールを先に示した場合，むしろ個々の生徒の鑑賞は，自由な広がりを制限され，多くの生徒の鑑賞文の内容が似通ったものになってしまう傾向が見られたのである。つまり，どの段階でどのような情報を与えるか

*広島大学大学院教育研究科

ということをより慎重に判断する必要がある。

Ⅲ．研究目的

本研究の目的は，作品に関わる情報の質と，掲示方法，与えるタイミングを吟味し，生徒たちが豊かに感じ，表現することができるような授業をつくり，作品についての様々な情報を得ることによって，作品をより深く味わい，感性を磨くことができるかを検証することである。

Ⅳ．授業実践

1　生徒の実態

授業の対象となる本校の２年生は，興味関心が高まれば集中して制作することができる。鑑賞では豊かに想像することができる生徒がいる一方で，何を書いたら良いのかわからない生徒もいる。

2　授業実践

（1）題材の掲示方法

画家である熊谷守一の作品を取り上げる。彼はフォービズムの画という位置づけをされている。しかし，初めは写実画から出発し，次に表現主義的な画風となった。やがて形を単純化して，輪郭線，平面的な表現で抽象度の高い「熊谷様式」を確立している。自然や身近な小動物や花などを描いた画家で，洋画だけでなく日本画も好んで描き，書・墨絵も多数残している。それらの作品を鑑賞することで，いろいろな絵画技法にふれたり，熊谷自身の生き方などを考えだすことができる。はじめは自由に想像する時間をしっかりとり，そのあとで科学的概念である，熊谷の人生や生き方にまつわるエピソードなどを紹介した。作品はスライドやプリントなどで示し，じっくり見ることができるようにした。作者の人生を年表にして，スライドなどでは作者の言葉や写真を示しながらすすめた。

熊谷という人物の考え方などを知った後にどのようなことを作品から感じるのかを分析する。

（2）授業概要

日　時　平成26年11月10日（水）

年　組　第２学年２組　計40名

（男子20名，女子20名）

場　所　美術教室

題材名　画家　熊谷守一氏の作品の鑑賞

「いろいろな視点で鑑賞しよう」

初めに熊谷の抽象的な作品を見たとき生徒は，「何だろう？目玉焼きみたい。」など，それぞれが想像して感じることができていた。また，熊谷の人生や生き方を知ることにより，作者の気持ちを想像して，それぞれの作品から様々なことを感じとっていたようである。最後に，好きな作品を１つ選ばせたときにも，生き生きと素直な感想を書くことができていた。

（3）鑑賞プリントにおける熊谷の作品

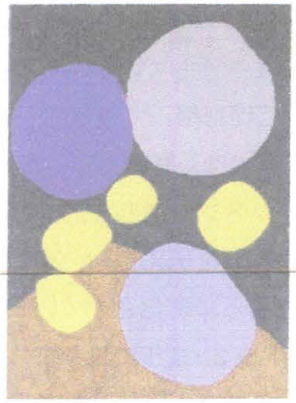

図１「あじさい」

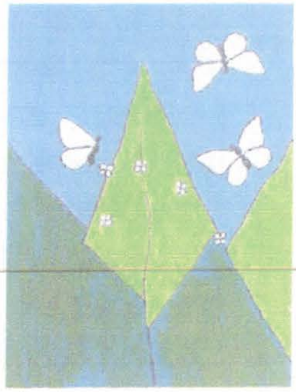

図２「のりうつぎ」

図３「馬」

表１　生徒の鑑賞文の内容

作品に関わる情報を与える前	作品に関わる情報を与えた後
・黄色いところが指みたいだと思った。 ・２つの世界を表している。 ・絵が単純。 ・いろんな見方で見れる絵。 ・不思議。 ・自分の人生のことが描かれている。 ・暗い森のなかの絵。 ・悲しそう。	・熊谷守一は本当に虫と仲良いのだなと思った。 ・死んでしまった子どものために，子供の喜びそうな優しく分かりやすい絵を描くようになった。 ・守一さんは動物がとても大好きで，自然と一緒に暮らしてありのままに描きたいと思った。 ・自分もたまにあることだが，描く視点を変えることで絵の性質や表現が変わって，それが好きになることがある。 ・大好きな馬に対する色と，いなくなって悲しくなった色が混ざったのだと思った。
	・本当に好きなものを描くときのウキウキした気持ちが表れていた。 ・自由を感じる。 ・夜，酒を飲みながらのんびりと絵を描いていると思う。

Ⅴ．授業実践の検証

（１）検証計画

まず，パーソンズの「絵画鑑賞における美的体験の認知上の発達段階」（パーソンズ，1987）をもとに，Ⅰ～Ⅲ期の児童・生徒の鑑賞活動における具体的な様相を想定した。児童・生徒の書いた鑑賞文やワークシートへの記述，発言等の質を（表２）を用いてカテゴライズする。このルーブリックをもとにしたカテゴライズによって，個人の状態を把握できるようにする。次に，レーダーチャート（図４，５）に表すことによって各期の鑑賞能力の発達傾向をつかむ。このレーダーチャートによって，集団の傾向を把握できるようにする。

表２　児童・生徒の気づきについてのルーブリック

	気づき（鑑賞文）の内容
５段階	・色使いや描き方，構図や技法など，造形要素に関する気づき ・作品の主題（作者の表現意図）に対する自分なりの解釈 ・科学的概念を踏まえた自分なりの解釈や批評，価値判断
４段階	・客観的事実を結びつけて（総合，対比）生まれた気づきや思い ・画面から直接見取ることのできない部分を推察したもの ・科学的概念と結びつけた気づきや解釈
３段階	・画面に描かれた客観的事実を根拠とする気づきや思い，比喩表現など
２段階	・色や形，モチーフや場所など，画面に描かれた客観的事実の羅列
１段階	・理由を伴わない漠然とした感覚（「好き」「おもしろい」「不思議」等） ・作品の世界から離れた空想

（２）結果

授業実践を行い，作品に関わる情報を与える前と与えた後の生徒の鑑賞文を，ルーブリック（表２）をもとにカテゴライズし，その結果をレーダーチャ

ートに表すと，次のようになった。

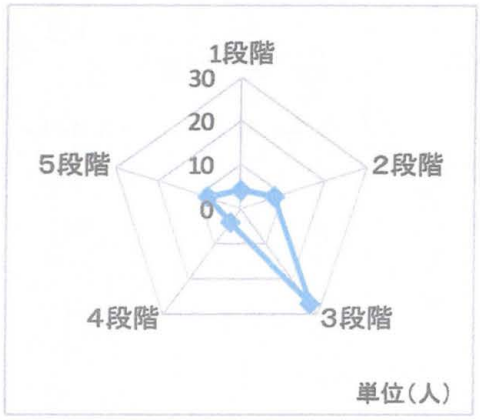

図4　レーダーチャート①
（作品に関わる情報を与える前）

（3）考察

図4の，作品に関わる情報を与える前の生徒の鑑賞文を分類した結果，作品に描かれたものを自分なりに解釈し，「～に見える。」などの比喩表現（3段階）が最も多かった。また，何も書くことができなかった生徒や「不思議なかんじ。」などの漠然とした感覚（1段階）や，「丸がある」などの事実のみ（2段階）を書く生徒もいた。

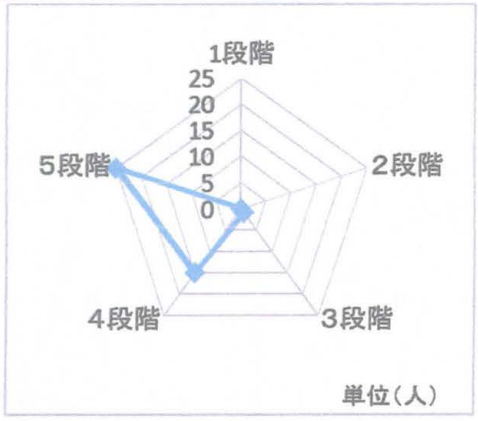

図5　レーダーチャート②
（作品に関わる情報を与えた後）

一方，図5の，作品に関わる情報を与えた後の生徒の鑑賞文を分析した結果，5段階の，色使いや，描き方についての内容や，作者の人生を想像した上での自分なりの解釈などを書いた内容（5段階）が最も多かった。

これらの結果から，作品に関わる情報を与えた方が，自分が感じたことについて，なぜそう思うのか，理由を書く生徒が多くなり，より自信を持って表現することができたのではないかと考える。

今回は，情報を与えるタイミングを授業の途中にすることで，初めは自由に感じる時間をとることができ，様々な視点で作品を鑑賞することができた。そして，作品に関わる情報を，熊谷守一の人生や生き方にスポットを当てて授業を行った。そのなかには，熊谷の言葉や，悲しい出来事，様々なエピソードが含まれており，波瀾万丈な熊谷の人生や，熊谷という人間の魅力を伝えたい，というところから授業を考えた。つまり，作品には作者の思いが込められていたり，自然と表れていたりすることを感じることができるような，豊かな情報を与える必要があると考える。

Ⅵ．おわりに

本研究では，思考・判断について，「解釈」「批評」「共有」をキーワードとして，美的対象を作品に関わる情報との結びつきの中で捉え直した。それと同時に，自らが培ってきた感性を基準に分析，解釈しながら，作品の価値を総合的に判断できるようにすることをめざした。そのため，情報の質や与えるタイミングを考慮し，より深い鑑賞ができるように取り組んだ。その結果，自由に感じることに加えて，作者の人生や形，色，モチーフがもたらす意味や理由を考え，なぜそう感じるかを表現することができた生徒が多くいた。

今回の実践で得たものを活かし，作品に関わる情報の与え方や，どのように授業をつくるか，取り扱う題材は何か，発問などを工夫し，生徒の自由な発想が引き出していきたい。また，作者の人生や考え方が作品に影響を及ぼしていることを，生徒に感じさせるような授業をつくることも大切にしていきたい。

引用・参考文献

天野紳一・島谷あゆみ・橘由紀恵「図画工作・美術科の基本的な考え」, 2014.

Michael J. Parsons『絵画の見方（訳者　尾崎彰宏）』（1987, CambridgeUniversityPress）

Teaching practice of appreciation gave a variety of knowledge related to the work Ⅱ

Yukie TACHIBANA and Kazunami MINE

Abstract: In this study, in appreciation, "interpretation", "criticism", as the keyword "Shared", when given the information related to the work, for the purpose of verifying whether feel how and expressions of students change how there. Verification When In this paper, we consider the timing of quality and give the information, it was to draw a richer sensibility. As a result, was analyzed appreciation statements student before and after giving information such as the author of life, better after it has given information, based on the information by the interpretation of my own, imagine with a rationale I was that wrote the student often. Quality and give the timing of information related to work, were also obtained opinion about posting methods.

Key words: Scientific concept, appreciation, analysis